

ヨアヒム・ラートカウ著
海老根剛・森田直子訳

『自然と権力』

——環境の世界史——

みすず書房 二〇一二年・七刊

A5 五九二頁 七二〇〇円

本書は、ドイツ環境史の第一人者であるヨアヒム・ラートカウの名著であり、英語や中国語、韓国語にも翻訳された世界的な話題作である。ひとりの歴史家が明確な問題意識をもって書き上げた「環境の世界史」であり、今日の環境問題を考える上でも参考になりそうな示唆に富んだ大著である。歴史学者や環境学者に対してだけでなく、電力会社や大企業の指導部、政治家、官僚、地方自治体の職員、ジャーナリストや環境保護団体・活動家に至るまでのすべてを等しく挑発する刺激的で大胆な著作でもある。

本書の扱うテーマは多岐に渡る。第一章「環境史を熟考する」では、環境史研究が陥りがちな視野狭窄と袋小路から話を始め、環境史における価値判断という難問を読者に突きつける。第二章「自給自足と暗黙知の生態学」では、近代以前における人間と自然環境との共生関係を、焼き畑農業、狩猟と動物の飼いならし、庭園と果樹栽培、農耕と牧畜、そして「共有地の悲劇」と宗教の働きにも注目して叙述する。第三章「水、森林、権力」は、水と

森林の使用をめぐる展開する支配、権力、統治の諸相を描く。日本語版のために書き下ろされた一節「日本という選択肢」は、数少ない欧文献に依拠しており、日本の読者には物足りないかもしれない。原注からも窺い知れる著者の徹底した文献収集癖を考えるならば、日本の環境史家も国際的にもっと積極的に発信してください、というラートカウ流の挑発として受け取りたい。

第四章「環境史における分水嶺としてのコロナリズム」は、微生物と疫病がもたらす生態学的ダイナミズムと植民地における近代的環境意識の芽生え、そして環境史におけるヨーロッパの「特殊な道」を論じる。第五章「自然の限界にて」は、工業化時代における環境危機とそれに対する様々なレベルでの対策を取り上げる。第六章「グローバル化の迷宮のなかで」は、二〇世紀の環境史を描く。失敗に終わったアメリカ化、血と大地の熱に憑かれたナチズムの「生存」主義、「平和的な」原子力の夢と癌の不安、環境保護運動と開発、観光、消費社会……。現代の環境政策における不確実性という問題を提起した上で、終章では「環境史の役割」を述べる。「日本語版へのあとがき」フクシマの事故の後に考えたこと、そしていくつかの個人的告白」は、将来のエネルギー政策を考える上でも意義深い文章となっている。

本書の刊行後、『ドイツ反原発運動小史—原子力産業・核エネルギー・公共性』（海老根剛・森田直子訳、みすず書房、二〇一二年）、『木材と文明』（山縣光晶訳、築地書館、二〇一三年）という、原子力と木材を主題とした著作が続けて翻訳された。ラートカウの環境史が身近

になったのは、非常に喜ばしいことである。

(渡邊裕一)